

# 受賞論文

## 第6回ナショナル・トラスト研究奨励賞受賞

第6回受賞者 角倉 起美

### 受賞論文

工藝的アプローチによるリビングヘリテージの保存・利活用に関する研究

ーヴォーリズ六甲山荘におけるランドスケープデザインの実践ー

### 受賞者プロフィール

氏名 角倉 起美

出身 大阪市

学歴 大阪藝術大学大学院芸術研究科博士後期課程修了 博士（芸術）

現在活動 認定特定非営利活動法人アメニティ 2000 協会 運営委員・

理事 文化遺産信託研究会 正会員

一般社団法人日本建築学会 正会員 工芸家(陶芸)

大阪芸術大学大学院助手



### 講評

奨励賞への応募論文として、今回大阪芸術大学への博士号請求論文として提出されているものに基づくものであるが、私たちとしては著者が博士としての学術性を有しておられるかなどということについての評価を行う立場にはまったくなく、むしろ同氏がこの論文を通じてアメニティ2000協会に対しての、学術的貢献を高く行っておられることによって、私どもの賞を受賞されるにふさわしいと判断できるものであることをご報告したい。

この論文は、何よりも高い学術的見地からの執筆がなされるということで、アメニティ2000協会（以下アメニティ）が運営する六甲山荘について、その建物の紹介（歴史的、地理的など）あるいはアメニティ2000協会によるその購入の経緯、また購入後の管理活動の展開、などアメニティ会員としてまず予想されるアプローチからではなく、むしろ著者が、一方では工芸家としての立場からご自身の活動を分析的に振り返りつつ、他方、その作業が従来の、例えばデザイン論を含めた考察や研究方法・姿勢が大きく開かれ、新しい地平への展開を見せていることを、哲学的視点を含めて理論的に証明し、英国ナショナルトラスト運動を前提としつつ、アメニティで行われている独自のヴォーリズ六甲山荘をめぐる実践そのものの事例として取り上げられているからである。そのような叙述は、しかし、現実にアメニティが行っているこれまでの活動を理論的に分析し、会員自らが協会の活動を理論的に分析・整理して理解するためには非常に有効であり、協会が創立20年を迎えてぜひ行うべき必須の課題に応える内容を含むものである。

詳細については実際に本論をお読みいただきたいが、この論文で繰り返し強調されるひとつの事柄は「関係性」である。例えば一つの文化遺産、アメニティ的に言うと「六甲山荘」は、さまざまな関係の中、六甲山という自然環境、別荘地としての人間関係を含む社会環境、その建設に携わったすべての人々の関係性、そこでの具体的な生活の営みを支えた家族をめぐる集団、この建物の継承、保存に携わる人々のつながり（そこにアメニティも含まれよう）などの、様々な関わりの「蓄積」のなかで存在しており、それは研究者をも巻き込んでの研究対象であり。その対象との実存的（という用語は本論では用いられていないが）対話のなかで理解されるべきものだと、言えるであろう。この点について著者は自らの工芸家としての立場について「個人の知識や経験を必要とされるフィールドで展開する工芸は、手仕事における先達の実践知、暗黙知などをもった連続性の経験の積み重ねの中から生まれる」（9ページ）と自らの活動への分析を行っておられるが、それはまたアメニティという法人を個人として置き換えても妥当する主張であろう。本論で、協働、共有、対話、養育さらに臨床、などという単語が繰り返し用いられるのは、それらがまさに対象者と観察者との相互関係、相互に問いかけ応えあう関係のなかにあり、その対話を通じて将来にむかってその対象が継承されていくものであり、それゆえに、例えば六甲山荘は過去の歴史的記念物ではなく、現在を通じて未来にその存在の意義が発信し続けられる「リビングヘリテージ＝引き続きコミュニティに対して意味合いをもたらし続ける文化遺産」（11ページ）として存在しているのである（この点について本論3.1.2の「リビングヘリテージの3つの課題」は、私たちのあり方への反省を促す興味深い指摘となっている）。本論を締めくくる最後の「常に対話によるデザイン行為を行うことが重要である」という一文は、これからのアメニティの活動に関わる私たちすべてのメンバーにとっての基本姿勢を指し示すものであろう。

以上のような検討の結果、審査委員全員の合議の上、角倉起美氏の本論文に対して第6回ナショナル・トラスト研究奨励賞者として理事会に推薦することに決しました。

なお本論文によって角倉氏は大阪芸術大学学長賞を受賞されることも付記致します。

文責 田淵 結

審査委員 飯畑正一郎、清水彬久、田淵 結（代表）、津枝勝見